

子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2016年5月 NO.191



[もくじ]

- 2～3 今まで。…行正忠義
- 4～5 薬になる植物について…松野倫代
- 6～7 第26回高知出版学術賞を審査して…佐藤恵里
- 8～9 オークランド（ニュージーランド）個展旅日記②…西悟
- 10～11 ピノキオさんが生まれた国で（第三回）～小さな種を、蒔き続ける～…並河咲耶
- 12～13 高知市文化振興事業団2月～3月の事業から
- 14～15 風俗歳時記・風伯

今まで。

一九七八年八月、岡山の隅っこ
の田舎に生まれる。B型末っ子お
とめ座。

幼稚園では、どちらかという
と無口。どちらかというといじめっ
子。

長ズボンを穿いてきたお友達に
いちやもんをつけ、先生に怒られ
る。

小学校では出る杭は打たれる方
式で上級生から制裁を受ける。た
ぶん生意気だったのだろう。小学
三年生あたりから何かしらで目立
ちたいと強く思い始める。

発表会では張り切るタイプにな
っていく。

小学四年生、作文のコンクール

に物語を書いて表彰状をいただく。
この時に「文章を書くことって面
白いかも」と感じる。

小学五年生、クラスに一人くら
いはいる「ひょうきん者」という
地位を確立。

小学六年生、調子に乗り副生徒
会長になる。ここで重要なことは
生徒会長ではなく、副生徒会長と
いうことだ。あんまり責任のない

副生徒会長。役割のよくわからない
副生徒会長。生徒会長が不在の
時、朝礼などで号令をかける副生
徒会長。とても居心地のいい副生
徒会長。

小学一年生から始めた剣道。小
学四年生から野球。どちらもパッ

行正 忠義

としなかったがなぜか足が速くな
り、町内のマラソン大会などで優
勝。

小学校六年間で「少し足の速い
ひょうきん者」の出来上がり。
中学に入り、陸上部に入部。ひ
たすらグラウンドをぐるぐる走り回
る日々。

何がどうなったかわからないが、
人生最大のモテ期を迎える。

僕のサインが女子の部屋に飾つ
てあったり、ファンクラブ的なも
のがあったり、モテにモテた。が、
純朴だったのうまく対応する事
が出来ず悶々とした中学生生活を過
ごす。結局、ひたすらグラウンドを
ぐるぐる走り回る甘酸っぱい日々。

陸上での推薦で工業高校に入学。
ほぼ男子校。旋盤、溶接や鑄造な
どなど楽しい授業。大体の生徒が
運動部に所属し、ボールを投げた
り、ボールを蹴ったり、竹製の棒
状のものを振り回したり、相手の
胸ぐらを掴み投げ飛ばしたり、鉄
製の重そうなものを持ち上げたり、
チャリで山道を登ったりしていた。
僕はもちろん、グラウンドをぐるぐ
る走り回っていた。

箱根の山を登っていく駅伝に出
たいと思い、広島大学を受験す
るが不合格。大学を落ちたショッ
クなのか、突然、「大学には進学
せず劇団に入る」と言い出し、両
親や先生方を困らせる。ずっと心
のどこかで役者になりたいと思っ
ていたのだろう。先生に説得され
高知に新しくできる大学に願書を出
すことに。

もし、ここがダメなら劇団に入
って良いという条件で。

そして、僕は高知にやってくる。
高知にやってきて、僕はついに芝
居を始めてしまう。学生の本分の
学業もそっちのけでずばずばに芝
居にはまってしまふ。学生時代は

本屋さんで売っているような既成台本を上演しており自ら脚本を書いたりしなかった。書きたい事もなかったし、書き方も知らなかった。とにかく、舞台に立っていたかった。芝居づけのフルスロットルな学生生活を送っていると卒業のころには「就職」という選択のできない体になっていた。そのかわり「役者になります」っていうエキセントリックな台詞を平気で言っている精神と勇気が備わったスーパードイになった。卒業生の就職先のリストのようなものがあって、○○電機とか△×製作所など有名な企業名が並ぶ中、僕の欄には「役者希望」と書いてあった。「役者希望」。「役者希望」ではなく「役者希望」。この違いは何だろう。僕は「役者になります」とは言ったが、「役者希望」とは言っていない。が、その時の僕は「役者希望」だったことには間違いない。

卒業後、とあるライブハウスの方の勧めで、芝居小屋をやり始める。芝居小屋の名は「BELIEVE EMPLOY」。イタリア語で「良い

天気」という意味。大学で同じ演劇部だった丸山という男と一緒にやっていた。ほんとに一緒にやっていた。いろんなことを疑われるくらい一緒にやっていた。

そのころから、脚本を書き始める。身も心も削りながら脚本を書いていた。

体の中にある混沌とした悶々とした何かを文字にし、声に出し、芝居にしていく。その時はそれしか出来なかったし、それしかなかった。

今もあまり変わらないが、この時芝居と向き合った時間が今も僕の中にあり、芝居を作るときの土台になっている。

道路拡張により、芝居小屋「BELIEVE EMPLOY」は閉店。

その時の劇団をやめ、若者が一度は心に思う「上京」を夢見る。

盛大なる壮行会を行ってもらい、役者で一旗揚げるまで戻ってこないとい心を決める。一旦、実家の岡山に帰りお金を貯めるために働く。しかし、地元の友達と遊ぶことが多くなりまったくお金は貯まることはない。なんとなくの日々が過

ぎていく。

そして、娘を授かる。

しらっと高知に帰ってきて結婚。そして、就職。家庭を持つ。

いろいろないろいろあり、現在。

劇団シヤカ力の主宰となる。役者演出、脚本、わがままなど担当。脚本を書くときはみんながわかる言葉を使い、カッコつけずに気持ちのそのままを表現することを心掛けていく。

でも、そんなにはうまくいかない。今までまだ一度も完璧な台本を書き上げたことはない。だから、書き続けているのかもしれない。もっと面白いものを、もっと多くの人へ。野望は尽きない。

一昨年より、観客と審査員の投票により一番を決める短編演劇祭 四国劇王というイベントに参加。一年目、なかなかの手応え。二年目、一人芝居で玉砕。そして今年三年目、ついに、ついに、ついに四国劇王になる。

正直なところほっとしている。いままでやってきたことは間違っていないかったんだよって言ってもらえたような気がした。

そして、四国劇王として四国代表として神奈川かもめ短編演劇祭に参加。

演出賞をいただく。とてもうれしかった。一緒に芝居を創ってくれた方々に感謝した。でもまだまだ足りない。もっと面白いものをもっと素直な言葉でお客さんに届くものを。

そのために言っておきたいことがある。

今まで、支えてくれた方々、家族、芝居を観に来てくださった皆様、ありがとうございます。そして、これからもよろしくお願いいたします。

ゆきまさ ただよし

劇団シヤカ力主宰。二〇一六年一月に開催された「神奈川かもめ短編演劇祭」にて演出賞を受賞。

薬になる植物について

松野 倫代

を薬として利用してきました。

「くすり」の語源は草を摺る(くさをする)ことに由来し、「薬」は草を楽しむと書きます。私たちが植物を「くすり」として利用してきた歴史は古く、紀元前三〇〇

確にはガマの花粉)を蒲黄(ホオウ)と呼び、外用では止血薬(血を止める薬)、漢方では炎症(はれ)を抑えて、尿を排出しやすくする目的で処方されています。

植物は湯通しや乾燥などの調製・

加工を経て、「生薬^{しょうやく}」として漢方

薬や民間薬に利用されるだけでなく、植物に含まれる成分を抽出し、化学修飾をした後、医薬品原料としても利用されます。ケシから抽出される「モルヒネ」はがん患者

さんの痛みを抑える鎮痛薬として、園芸で馴染みのあるニチニチソウはその成分を「ピンクリスチン」と呼び、白血病治療薬に使われています。最近よく耳にする抗イン

フルエンザ薬「タミフル」はトウシキミの成分「オセルタミビル」が有効成分であり、香辛料としても知られる「八角」から抽出したものです。興味深いことに、これらの植物の多くは民間伝承薬として昔から地域で利用されてきた植物です。

二〇一五年のノーベル生理学・医学賞はマラリアに対する薬の開発を行った屠呦呦(と・ゆうゆう)博士、ウィリアム・C・キャンベル博士、そして大村智博士に贈られました。マラリアは蚊が媒介するマラリア原虫によって引き起こされる感染症で、年間百五十万人から二百七十万人が死んでいます。これまでアカキナの木から得られたキニーネなどの成分が抗マラリア薬として使用されてきましたが、心臓毒性などの重篤な副作用があるなどの問題がありました。屠博士らが見つけたアルテミシニン^{アルテミシニン}はヨモギ属植物のクソニンジンから抽出され、動物体内中のマラリア原虫の活動を抑えるとともに毒性を抑えるという画期的なものでした。現在、このアルテミシニンか

地球上には高温多雨の熱帯雨林から乾燥した砂漠地帯など様々な環境が存在します。そして、生物は長い時間をかけてそれぞれの生息場所に適応するため多様に進化してきました。とくに植物は移動が難しいため、葉や草丈、花の形を変化させ、さまざまな物質を合成することによって適応してきました。ヒトのゲノム情報が解明され、シロイヌナズナやダイズなどの植物のゲノム情報と比較した結果、植物は物質合成に関わる遺伝子をヒトの数倍持つことが明らかとなりました。ヒトが持つ数倍の数の遺伝子を持つため、植物は数千種にもおよぶ物質を作ることが出来ます。私たちはこれらの物質

ら誘導されたアーテスネットがマラリアの特効薬として用いられています。屠博士はマラリアに対して効果のある植物を探すために、中国に伝わる中医薬の処方をもとにスクリーニングを行いました。そして、その中からマラリア原虫に効果のあるクソニンジンを探し当て、その成分アルテミシニンが有効であることを見つけました。このように病気の発症のメカニズムが科学の進歩によって解明されることで、私たちの身近な植物の可能性を再探索することが行われています。生物多様性による植物の可能性は今後も医薬品開発において欠かせないものとなっています。一方で、経済成長や開発によって植物の可能性が認知されることなく失われている現状もあります。

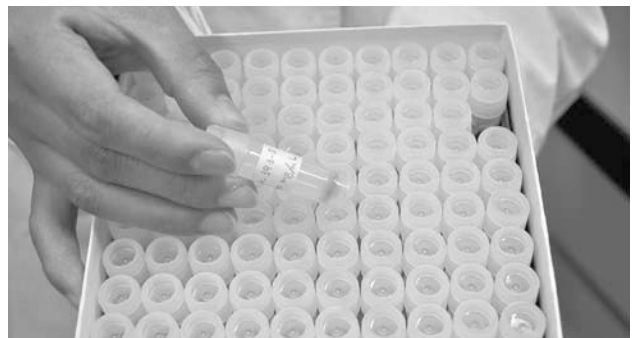
「高知県植物誌」を出版しました。高知県に自生する植物を網羅的に採取し、^{ききょう}腊葉標本（押し葉）の作製・分類・同定を行うことで、高知県には約三千百七十種の植物が自生することが明らかとなりました。国内で絶滅した種として扱われていた「マルミスブタ」のような十四種の植物が高知県には自生していることも確認されました。地域に自生する植物が明らかになることで、絶滅危惧種を鹿の食害から保護する活動が始まり、絶滅危惧植物の生活サイクルを調査研究して園内での系統保存にも役立つ取り組みを行っています。

一方で、当園ではソロモンやミヤンマーで植物誌を作る活動にも協力しています。調査領域が国レベルですと何十年というプロジェクトになるので、中国や欧米の植物園と連携して進めています。特にミヤンマーは、近年急激な経済発展を遂げており、地域開発による植物種の絶滅やランなどの希少種の乱獲が起っています。ミヤンマーは大きく分けて八つの民族からなり、それぞれの民族間で異なる文化、習慣を持つため、民間

伝承薬も民族間での多様性を反映しています。植物誌の編纂を目的として海外調査を行うにあたり、これらの民間伝承薬も聞き取り調査を行い、植物の採取情報とともに記録しています。海外調査で得られた植物サンプルは葉、茎、根、果実と部位ごとにエキシ化しライブラリーを作成します。植物サンプルをエキシにしてライブラリー化することで、長期保存や医薬品の開発の基礎となる活性試験を効率よく行うことが出来ます。



海外で採取された植物サンプル。部位ごとに乾燥され保存している
(高知県立牧野植物園の資源センター内標本庫)



エキシ化された植物サンプルのライブラリー

現在、ミヤンマー産植物のエキシライブラリー作成はNo.1・700まで進み、糖尿病や痲痺（まひ）など様々な病気のメカニズムを研究している研究機関でスクリーニングが行われています。今後、植物園発の薬が皆様のもとに届く日があるかもしれません。

まつの みちよ

名古屋市立大学薬学部出身、博士（薬学）、薬剤師。高知県立牧野植物園植物研究課研究員。

高知出版学術賞を審査して

佐藤 恵里

高知出版学術賞は一九九〇年から始まり、今年で二十六回目となる。七名の審査委員中三名が新たに交替したので、これまでの経緯とともに本賞の性格を確認したうえで審査を行った。

本賞は、学術研究の振興を図るとともに市民の教養に資する目的をもって設けられているので、学術的な著述を対象とするが、研究者しか理解できないような専門書は除いている。また去年から加えられた「特別賞」は①文化の向上に資する②出版の労を称えるに値する③将来が嘱望され奨励に値する、のいずれかに該当する著作を対象としている。

本年の応募作品は七点で、過去五年間で最も少ない（昨年は十六点）。二〇一一年以前は十〜二十台を数えた。この減少傾向は東日本大震災以後の国情とともに、地方大学のとくに人文系が身を置く厳しい現実の投影かもしれない。

第一次の審査を通過した六点について委員間で精読し、第二次の審査の結果、次の三点（本賞二点、特別賞一点）が選ばれた。なお、受賞作に順位はつけられていない。また、応募作品には、表題に照らして内容に一貫性を欠いたり、あるいは論旨に重複が目立ち、誤字・脱字が多いといったものもあり、そうした未整理のまま刊行を急ぐ姿勢を批判する意見も出たことを付け加えたい。

◆本賞

川島 秀一 著

『安さんのカツオ漁』

（富山房インターナショナル 刊）

著者はカツオ船団の一大拠点である三陸の気仙沼市に生まれ育ち、三十年にわたり各地を歩いてカツオ漁の民俗を調査研究してきたひとで、現在東北大学災害科学国際研究所教授の職にある。本書は、土佐久礼の一本釣り漁師で元船頭の青井安良氏こと「安さん」の半生を主題として、これを軸に展開した一本釣り漁の民俗誌といえる。二〇〇八年に安さんと出会い、その漁師としての考え方・生き方に感服し、七年間の交流を通して「事

例の列挙」ではなく人間がしかと見える民俗誌を志したようである。

七章構成で、前半四章が土佐を舞台とし、後半三章は東日本震災で甚大な被害をうけた気仙沼港復興動向と、「旅日記」と称しているが著者がカツオ漁探訪で歩いた宮城から沖縄まで十八ヶ所の小レポートである。中心はやはり前半三章にわたる久礼と「安さん」の部分であろう。昭和二十一年（一九四六）生まれの彼は十五歳から四十一年間船に乗り、船主の傍ら二〇〇一年に船を下り、「餌買」という漁の要を握る役に回る。こうした個人のライフストーリーを縦にして、各地の漁師の民俗を踏まえつつ一本釣り漁という生業

の全体を捉えようとしている。極めて具体的に船上の暮らしや餌買の仕事の実態を描き出している。

「旅日記」の章を含め、平易で生き生きとした文章のなかに、漁師に会い、教えてもらったという感謝と同時に発見のよろこびがある。それはおそらく「漁師の目で歩くこと」を研究の基本姿勢としているからで、読む側は漁師たちの自然との付き合い方や信仰など魅力的で示唆に富む世界に触れることになる。

本書は、土佐を代表するものの減少する一本釣り漁に係り「安さん」を主題に生きた民俗誌を提供した点で民俗研究に寄与し、一本釣りという営為の内実に疎い一般

人に有益な書と思われる。ただ残念なのは、表題が全体を反映していないことである。また索引が無いことも惜しまれる。



安さんのカツオ漁

白井 朗高橋 嘉夫 伊藤 孝丸山 明彦・鈴木 勝彦 著

『海底マンガン鉱床の地球科学』

(東京大学出版会 刊)

深海には陸地のように高山や台地が聳え立ち、海底は砂漠のように砂や粘土で覆われて、大量の金属資源が存在している。人間に有用な元素や鉱物が濃縮した岩体を鉱床というが、本書は、世界の海域に普遍的に分布し、鉄・マンガン酸化物が濃集した岩塊や深海粘土を「海底マンガン鉱床」と呼んで、地球科学の見地からその実像を明らかにしたものである。

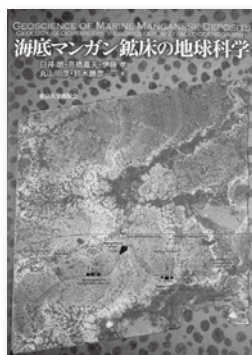
海底マンガン鉱床にはレアメタルやレアアースが含まれることから、産業側の急激な需要を背景に近年開発ブームが起こっているが、本書は、そうした短期的な資源開発のための実用書ではない。科学的な共通理解こそが開発への最短の道として、約半世紀にわたる研究成果を海洋地質学、資源地質学、鉱物学、地球化学、微生物学など多様な視点から整理し、実態と起源に関して知見と課題を示した先進的な学術書といえる。

はしがきからあとがきまで全体を通して文章が簡潔であり、述語や略語の説明が備わり、専門分野に閉じられていない。読者として若い研究者はもとより、学生、資源関連企業の関係者、さらに地質に興味を持つ一般人を想定して、

それは成功している。

鉄・マンガン酸化物物の「百万年に数ミリの成長速度」や南アフリカのカラハリマンガン鉱床は二十億年前の原生代にできたなど、審査委員からは「科学的ロマンを感じる」といった感想や「一般人の世界観を変える内容」と評価する意見もあった。

著者五名のうち、白井朗氏が高知県関係者で、全員が研究現場の海で調査・観測を行ってきた人びとである。本書は著者たちが三年をかけて議論の上成ったもので、高知大の海洋コア総合研究センターをはじめ多数の研究者・技術者の協力があつたという。労作の出版を喜ぶたい。



海底マンガン鉱床の地球科学

◆特別賞

大澤 重人 著

『泣くのはあした 従軍看護婦、九五歳の歩跡』

(富山房インターナショナル 刊)

本書は、毎日新聞記者で高知支局長もつとめた著者が、元従軍看護婦・高橋いと志さん(旧姓村田猪利、一九二〇年高知県高岡郡生まれ)の話を聞き、日中・アジア太平洋戦争と戦後の時代史のなかに、その人生の軌跡を跡付けた記録である。

十八歳で看護婦免許を取得し病院勤務の後、一九四二年(二十二歳)に満洲へ渡り、林口陸軍病院を皮切りに各地を転々として負傷兵の看護に携わる。一九四五年八月の「終戦」後は、ソ連軍管理の捕虜収容所に収監され、また生きるために中国・八路军に参軍し、内戦が終わると無医村で働くなど、結婚・出産のなかさまざまな辛酸を舐めたすえ、戦後八年目の一九五三年に帰国し、以来定年まで高知で看護婦として働き、今日に至る。

こうした人生を、九十歳を優に超えて淡々とユーモアを交えつつ語ると志さんの記憶力は相当なものだが、それは「覚えとるんと違う。忘れられんがよ」という身に灼きついた記憶であり、戦後生まれの著者は「聞けるときに聞いておかない」という危機感から「柳の強さ」を持つこのひとの下に通い、生きた証言を掏って、この貴重な記録を編んだ。

いと志さんの軌跡にのっとり、彼女の過した場所とその期間を軸にした六章仕立ての構成とともに

文章が読みやすく、同時代の人々の体験談や文献資料を広く渉猟している。いと志さんの体験は彼女ひとりのものではないことが自ずと伝わってくる。戦中戦後を生き抜いた庶民の記録として、過酷な戦争の現実を実感させる本書は、戦後七十年を迎え、憲法改正が叫ばれる今、次代に伝えるべき書といえる。



泣くのはあした 従軍看護婦、九五歳の歩跡

さとう えり

一九四八年生まれ

高知女子大学教授を経て、現在高知県立大学名誉教授。第26回高知出版学術賞審査委員長。専門は日本演劇・芸能研究。著書に『歌舞伎・俄研究』(新典社)、『図説江戸の「表現」浮世絵・文学・芸能』(共著、八木書店)など。

オークランド（ニュージーランド） 個展旅日記②

西 悟

未知の地での初個展開催に、不安にのみこまれそうな思いが、全くの杞憂であったと判明したが、全ノースアートギャラリーでウエンディと初めて会い、話した時であった。

梱包作業、税関書類、発送作業を経て、作品群は七月中旬にノースアートギャラリーに到着したのだった。そして私が七月下旬にオークランドに降り立ち、いよいよノースアートギャラリーで作品を飾る準備かなと思いつつ、ウエンディに初めて会ったのだった。彼女に作品の展示方法を説明しようとする、彼女から思わぬ答えが返ってきたのである。「セイゴ、あなたはオープニングのレセプションの時だけギャラリーにいれば良いから、作品の飾り付けは全て私たちに任せて！」と言うのだ。私はてっきり自分が難しい展示に携わらないといけないと思いついていたのだ。日本だとアーティストが展示に関わり、展覧会期間中もずっとギャラリーにへばりついて、お客さんと応対するのが当たり前と思われがちだが、欧米では完全分業で、ギャラリーの飾り付け、お客さんの応対はギャラリースタッフがするもので、アーティストは制作すること、そしてお客さんとの関わりはレセプションのみというのが普通であったのだ。—そういえばアメリカ滞在中も展覧会は分業だったなあ！—と思う

出しつつ、私自身がすっかり日本式に馴染んでいたことに思わず苦笑してしまった。ウエンディは「せっかくニュージーランドに来たのだから、いろいろ見て回りなさい」と言ってくれ、私はその言葉に「〇〇%甘えることにした。—私の作品は彼女たちに任せよう。信頼してスタッフに任せれば良い—」と思ったのだった。

展覧会のオープニングまで一週間ほどあったので、オークランドのギャラリー、美術館、文化施設など、くまなく見て回ろうと決めた。

私は見知らぬ土地に来

ると、必ず美術館、博物館、音楽ホールを訪問する。特に美術館は絶対に訪問する場所である。私がアーティストだからということもあるが、一般的に美術館に行くと、その町の文化に対しての取り組み、文化の成熟度が見えてくる。また町の行政が文化に対してどのような考えているのかも見えてくる。つまり美術館、博物館を通して、その町の成熟度が感じられるのだ。ニュージーランドはまだ建国二〇〇年もたたない、更に世界の文化中枢圏とはかなり離れている国である。文化的にいうとかなりのハンディを背負っている国であると言っても良いかもしれない。私の住んでいる高知もそういう意味で



オークランドアートギャラリー

は同様のハンディがあるのかもしれない。ところが私が美術館、博物館を訪問し感じたことは、文化をこよなく愛おしいものと捉えている雰囲気があり、かなり成熟した文化圏を構築していることに気が付くのだった。それは美術館、博物館が文化を提供、提示する側だけでなく、そこに来場してくるお客さんにも愛おしさという雰囲気を感ずることができたのだ。一例を挙げると、美術館のギャラリー空間にいるスタッフ（係員）は、基本的に作品を監視する役目があり、誰かが作品を触るかもしれないと目を光らせている。この光景は日本どこに行っても同じだと思う。ところがオークランドアイトギャラリー（オークランド最大の美術館）のギャラリースタッフは、お客さんを見ながらいつも笑顔を見せている。そしてどのようなお客さんに対しても気軽に「何か質問などあれば私に声をかけて下さい」と言っているのだ。そこには鑑賞を楽しんでもらいたい、できるだけお客さんのサポートをしたいという気持ちが溢れている雰囲気を作っているのだった。ま

た鑑賞しているお客さんを見てみると、老若男女問わず、鑑賞することに非常に慣れていて、空間をとっても楽しんでいる雰囲気を感じていたのだった。日本ではお客さんの行動を監視し、問題を起こさないように管理することが大きな役目であるのが、ここではお客さんをサポートするのが主な役目と感じられたのだった。鑑賞者は体いっぱい作品を感じ取るためにこの場所に來ていることを知っているのだろう。スタッフの行動は些細なようで、でもほんの少しの対応の仕方ですぐ雰囲気は大きく変わってくることは見逃すことはできないなと思ったのだった。同じようにオークランド戦争記念博物館、国立海洋博物館、ワレスハウスなどでも同じような空気を感ずることができた。

更にここではマオリ族（ニュージーランド

の先住民）に対しての理解、そして尊厳というものが非常に強く感じ取ることができたのも私的に嬉しかった。日本で言うアイヌにあたるところが、マオリは六〇〇年ほど前にニュージーランドにカヌーで移り住み、そこから住んでいる先住民と言われている。白人



戦争記念博物館

との激しい戦いもあったらしいが、他の国と比べると、先住民に対する理解という面で、非常に先進的であるように感じられた。オークランドの人たちに聞くと、マオリと白人の関係は全てが上手くいっているわけではないが、お互いが努力して共存する環境を構築することが重要と位置づけているらしい。その努力するという姿勢が、今のニュージーランドの国を形作っているのかもしれないと思った。個人的にはマオリの作っている彫刻とか文様はすごい一言と感している。どこかマヤ、インカ文明に共通するところがあり、非常に引きつけられるエネルギーを感じたのだった。

③へ続く

にし さとる

画家・土佐塾中高校美術専任講師

ピノキオさんが生まれた国で(第三回) 小さな種を、時き続ける

並河 咲耶

春です。今シーズン最後のフラ
ンスでの公演ツアーから帰ってき
て、イースターの到来を待つ我が
家にも、春がやってきました。外
での花摘みや家庭菜園の手入れが
楽しい時期です。青空の下、豪快
に窓を開けて、ツアー続きで荒れ
た我が家の掃除をしていると、突
然、ブルブルブルと大きな音
が。何かと外を見ると、こんな車
が我が家の前の農道のような道を
びゅんびゅんと通過していきます。



間近で見た娘曰く「ゲホゲホデ
ホ！臭い！」どうやらガスの排気
量も凄まじいようですが、時折、
農業用のトラクターも混じる中、
色とりどりのアンティーク車が音
を立てて走っていく様はなかなか
滑稽で、愉快なものでした。私は
その間、冬を越えてつぼみをつけ
たカブの若葉や花を摘んだり(柔
らかくて美味しいのです)、雑草
を抜いて、これから様々な野菜の
種を蒔くための準備をしたりと、
お隣さんには「猫の額」と笑われ
る小さな畑で土いじりを楽しみま
した。

一月から二カ月半に亘り、テア
トロ・インプロヴィーズというカ
ンパニーの一員として、フランス
やイタリアで子ども達のために舞
台作品を上演してきましたが、今
回はその中でも特別な二日間につ
いてお話しします。毎年三月初旬に
イタリアのおヘソ、ボローニヤで
行われる乳幼児のための演劇祭で
のことです。

このフェスティバルを主催し、
通年の劇場運営・作品創作も行う
劇団 La Baracca (以下、バラッカ)
は、創造都市論で著名な佐々木雅
幸氏の著書にも取り上げられてい
るほか、彼らの乳幼児のための先
進的な試みについては、日本に限
らず各国の関係者にも評判で、日
本で児童演劇祭に関わっていた頃
から、行ってみたくてフェスティバ
ルのうちのひとつでした。ですので、
初めて参加(パフォーマーとして
作品に出演)した際の感慨は今で
もよく覚えています。

それから四年が経った今年は、
若手アーティスト枠「Artists Meet
Early Years (アーティストが小さ
な子達に出会う)」というプロジ
ェクトに単身で参加してきました。
乳幼児のための作品を創りたいと
いう意志を持つ若手アーティスト
を世界各国から公募し、ボローニ
ヤ市内の保育園・幼稚園に数日間
派遣するというプロジェクトで、
メキシコ、ドイツ、イギリス、オー
ストリア、イタリア(私はイタリ
ア/日本として参加)、トルコ、
ロシアの八組のアーティストが参
加していました。

私が派遣されたのは、ボローニ
ヤ大学の近くにある、バラッカと
も長い付き合いのある古い市立保
育園です。今年、バラッカの保育
園・幼稚園との取り組みは、なん

と三十年を迎えたそうですが、そ
の試みが始まった頃から、市長が
代わり、時代が変わっても、ずつ
と志を共にしてこのプロジェクト
を迎え入れてくれている貴重な保
育園だということを、後に知りま
した(残念ながら、近く、建物の
老朽化のため閉鎖になるようで
す)。

そんな特別な園で、一日目は二
歳児、二日目は三歳児を対象に(両
日共に約二十名程度)パフォーマ
ンスの種を探しました。

もともと、ソリストとして活動
したいと思っただけな私で
すが、ヨーロッパで子ども達を前
に舞台に立っていると、明らかに
外国人である私がなぜ彼らの前に
いるのか、ということが無言のう
ちに問われているような気がして、
「日本人であり、まがりなりにも
音楽家になるための教育を受けた
私」が子ども達のために出来るパ
フォーマンスとはなんだろうか？
そしてそんな「私」と彼らが、一
般的な「言語」に頼らないで作品
のためのコミュニケーションをす
るには、どんな方法があるのか？
を実験してみたい、と思ったのが
今回の参加のきっかけでした。

具体的には、日本の童謡や、木
の枝や貝殻といった自然や季節を
思い描けるような物を使用するこ
とで、遊びや音、そして人と出会
うことの温かさを共有したい、と

準備していましたが、なんのどっこい、一日目は、子ども達が入ってきた瞬間に、配置していた物は全て遊具と化し、まるで積み木で建てたお城が音を立てて崩れていくような状態を止めることが出来ませんでした。気を取り直してなんとか即興で凌ぎましたが、童謡を日本語で歌うほどの度胸はなかつたに終わりました。

終了後、オブザーバーとして見学していた園長さん兼コーディネーターの方との振り返りでも、まずは子どもを迎え入れ方についてお話があり、芸術的観点からではなく、学識的見地と保育園・幼稚園で実際に子ども達と接して得た経験の双方を基にした的確なアドバイスを頂き、反省点は翌日に改善することが出来ました。と同時に、オブザーバーが新しい素材やアイデアに関して好奇心を持ち、アーティストに対して臆することなく質問する光景は、どの試みでも共通して見られたようで、彼らの教育者としての意気込みも伝わってきました。

参加アーティストと、各園でオブザーバーを務めたローニャ市内の教育関係者(他の園の園長さんや、先生、教育機関のコーディネーターなど)が一堂に会し、互いに自由に意見を交わすことが出来る場も設けられており、ここで

私は気がついたのですが、このプロジェクトでは、「ワークショップ」という言葉はほとんど使われていませんでした。むしろ学校側は、「パフォーマンズ」の創作途中を鑑賞、という姿勢で臨んでいたのです。



Lise Vurpillot <http://www.lisevurpillot.com/>

近年、ワークショップという言葉は日本でも、だいぶ耳慣れた単語となってきたいて、美術館や文化施設が主催して行うだけでなく、学校でも、アーティストがやってきて、演劇やダンス、美術、音楽、伝統芸能など、様々な分野のワークショップが行われるようになっていきます。私も、我が家のイタリア人アーティストの行うワークショップのアシスタント兼通訳を行うだけでなく、劇場のスタッフとして働いていた際には、コーディ

ネーターとして、小中学校や養護学校、それから大学まで、様々な教育機関でのワークショップの現場に足を運ぶ機会がありました。そんなわけで、私なりに想い描くワークショップ像があったのですが、今回の保育園での経験は、いい意味で、そういった先入観を取り払ってくれる機会となりました。

イタリア語でワークショップは、laboratorio、英語のlaboratoryと言えいいでしょうか。つまり、実験の場です。フランス語ではatelierと言われることが多く、こちらもアーティストのアトリエのように、材料と向かいあって、没頭して、何かが生まれてくるところです。生まれてくるものは、奇跡的に生まれてきて、再現するには試行錯誤が必要な場合もあるでしょうし、傑作が四六時中生まれてくるわけでもないでしょう。実際、私の行ったパフォーマンズも、オブザーバーの方も指摘していましたが、画期的な手法や飛躍的な発明は何もありませんでした。

ただ、この実験は、私、という一人のアーティストが色彩となり、子ども達という真っ白いキャンパスにのせる実験なのです。同じ素材と手法を使ったとしても、必ずしも同じ作品が出来るとは限りませんが、子ども達、と簡単に言いますが、やはり十人十色で、二十人

もいれば、毎回状況は変化します。この場には、単純な足し算引き算だけではない、何かがあります。それでも、出来る限り、結果がその場の最大限となるよう、真摯に誠実に子ども達と向き合うこと、そして結果をその場限りのものとして捉えず、様々な外部的刺激や内面の成長を経ながらも、植物が根をめぐらせ、葉や花をつけ、実を結んでいくように、有機的に長期的に発達させていくべきもの(参加者も私自身も)と考えること、この二つを改めて体験して学んだ貴重な二日間でした。

なみかわ さや

日本で生まれ、高校・大学とアメリカで異文化の洗礼を受けた後、帰国するも、現在はイタリア在住。合同会社konja代表として、舞台や文化に関わる翻訳・通訳業務、日本へのイタリアのアーティスト招聘事業を行う。イタリアでは、ダリオ・モレッツティ氏の主宰するテアトロ・インプロヴィーゾでピアノ・打楽器演奏、経理を務める。一児の母。ご意見・ご質問等、お待ちしております！

konjainternational@gmail.com
www.teatroallimprovviso.it

2月～3月の事業から

富良野GROUP公演2016年

「屋根」

倉本聰が描く日本の家族史

二〇一六年二月十八日、かるぽーと大ホールにおいて、「富良野GROUP公演2016冬『屋根』」倉本聰が描く日本の家族史」を開催しました。

舞台演出からの引退を表明した倉本聰氏が手掛ける最後の作品となった「屋根」。

戦前戦後の激動期から大量浪費の現代へと続く時代の流れを、富良野の山里に暮らす明治生まれの一族の老夫婦の住まう家を軸として描いていきます。

戦争や貧困といった重いテーマを扱っているが、随所にコミカルな動きと台詞を入れることで、所々で場内に笑い声がこぼれ、二時間超の長い演劇でありながら、最後まで観客の興味をそらさないエンターテイ



メントとしても良質な舞台作品でした。後半のメインとなっていた老夫婦の、哀愁や寂寥感を強く感じさせる演技には、心を掴まれた方も多かったようで、終演後には目頭を押さえながら会場を後にする方の姿も見受けられました。

富良野GROUPは、「明治・大正時代に生まれた祖父母世代の生き様を思い出してほしい。そこには日本人が忘れてはならない珠玉の人生訓がある」という願いを本作品に込めています。その願いは、大ホールいっぱい詰めたお客様にきつと届いたことでしょう。

関連企画として、一日限定で大勢が新聞バッグを使うイベント「ワンデー新聞バッグ」に取り組み、公演関連記事の掲載紙面を使った新聞バッグ八百個が観客に配布され、大変ご好評を頂きました。
（入場者数・八百二十名）

高知市文化振興事業団サポーターズクラブのご案内

Cul^{カル}チャーず

多くの方の入会をお待ちしております。私たちの文化を、一緒に創りましょう！

特典 ①年間1公演招待 ②公演チケットの割引販売 ③横山隆一記念まんが館企画展招待 ④「文化高知」の送付
会費 1年間 3,000円（4月1日～3月31日、年度途中での入会でも3月31日まで）

お申し込み・お問い合わせは、高知市文化振興事業団 088-883-5071 まで

高知市文化振興事業団

豊中市発沖縄市・高知市連携演劇プロジェクト「PORTAL」

二〇一六年三月二十日（日）、高知市文化プラザかるぽーと小ホールにて、豊中市発沖縄市・高知市連携演劇プロジェクト「PORTAL」が上演されました。

本作は、関西在住で気鋭の劇作家・林慎一郎氏に脚本を、関西を拠点に世界的な活躍を続ける劇団維新派の松本雄吉氏に演出をそれぞれ依頼し、豊中市、沖縄市、高知市が連携して制作したもので、各市でツアー上演されました。

作品のテーマは「地図」。

実在する大阪のとある街の地図に、世界中に熱狂的なファンを持つ人気の携帯ゲームを通して見た架空の地図を重ね、さらに林氏が実際に街を歩いて感じて感じたものや、そこに住む人たちのエピソードなどを拾い集めてできた架空の「神話」を重ね、現実とも空想ともつかない不思議な街とそこに住む人々の姿が描かれています。

その戯曲の上を、劇団維新派が自身の作品にも度々用いる表現方法の一つである変



拍子のリズムに合わせて、登場人物たちはまるで地図の断片であるかのように、その街の記憶を語りながら歌い踊り、観る人を地図の中へと引き込んでいきます。

抽象的なセリフや隊列での規則的な動きで進む物語は、観る側にその解釈を委ねており、その人を取り巻く環境や世界観などによって作品の観え方はまったく違って感じられたことだと思います。

このような作風の舞台は都市部では盛んに上演されていますが、高知ではまだまだ少なく、貴重な鑑賞の機会となりました。来場者からは「内容は難しかったが、心で感じるままに楽しむことができた」「これを機に色々なジャンルの舞台を観てみたくなった」などを豊かにする、質の高い舞台芸術の開催を期待する声が聞かれました。

（来場者・八十二名）

高知市文化振興事業団 出版物のご案内



画帳の歳月

筒井広道 著

—土佐の洋画は、この人抜きには語れんき！

高知画壇の重鎮の、美と画業についての珠玉のエッセイ。

県展の知られざる内情、肩のこらない絵画論等、興味尽きない美術への誘い。（平成二年刊）

価格 2,097 円（本体価格 1,942 円＋消費税）

読み物から研究書まで。地域の芸術・文化に関わりの深い書籍たち
高知市文化振興事業団出版物 詳しくはホームページまたは088-883-5071へ

「本」か、 「ネット」か？



風俗歳時記

最近一冊の本を上梓した。社会人向けの「国語の本」である。読者の評価はさておき、本づくりを通して私自身、学ぶところが大きかった。

驚いたのは、本は著者が一人で書くものではないという発見だった。編集者の存在。これが大きい。本は、著者と編集者が共同でつくり上げるものなのである。タイトルや構成、文体や句読点の打ち方にいたるまで、繰り返し繰り返し、著者と編集者は確認し合い、検討し合う。

それは、苦しいけれど充実したプロセスでもあった。編集者からの的確なアドバイスなしには、自著が完成したとは思えない。

以来、書店で目にする本への見方が変

わった。どの本の背後にも、著者とは別に優れた編集者がいることを意識するようになった。

悩んだら本に問え。これが、日本人の信条だった。ちょっと前までは。

進路でも、恋愛でも、就職でも、人生観、社会観に関しても、悩んだら本を読んでじっくりとその解決策を考えようとしてきたのが日本人だ。

ところが、今ではインターネットがその役割を奪いつつある。

インターネットは便利だ。ほとんどの「問いかけ」に対して、即行で「答え」を出してくれる。

私自身、読書時間を削って一日中ネット

トの情報を追っていることがある。

けれど、その情報は断片的だ。細切れの答えが無数に提供されるけれど、深みのある全体的な認識が開けてこない。情報が多ければ多いほど、自分を見失っていくような不安を感じることもある。

その理由が、自分で本を書いてみてわかった。

ネット情報は、編集者による吟味と点検をくぐり抜けていない。そのため、系統性と一貫性がなく、内容も、無秩序な玉石混交なのである。

悩んだら、本に問うべきか。ネットに問うべきか。

…やはり本だ。と、思うのである。

(本の虫)



高知を撮る

第32回写真コンテスト入賞作品

桂浜の五色石

田所 睦三

(㊤昭和46年11月 ㊦昭和45年5月)

㊤昭和30～40年代頃には、桂浜でとれた五色石がみやげ品として浜辺で売られていた。

㊦浜辺で拾った五色石を背負い、孫と一緒に帰っていく光景です。

㊦観光客も浜辺で五色石を探している光景がよく見られた。

OFF BROADWAY MUSICAL Forever Plaid 2016



オフ・ブロードウェイのコメディミュージカル。2013年に日本で初演し即日完売という大人気を博した川平慈英（俳優・ナレーター）、長野博（V6）、松岡充（SOPHIA）、鈴木杜麻（ミュージカル俳優）の4人が、2016年、3年ぶりに帰ってくる!! 抜群に美しいハーモニーと楽しくやんちゃな会話、ちょっぴり可愛い振付と、4人の音楽への情熱に溢れた心温まるミュージカル。

【日 時】 2016年5月11日（水）18:00 開場 18:30 開演

【会 場】 高知市文化プラザかるぽーと大ホール

【助 成】 文化庁（劇場・音楽堂等活性化事業）

【入場料】 前売りS席（1階・2階）6500円 A席（3階）5500円
当日 S席（1階・2階）7000円 A席（3階）6000円
※全席指定。未就学児入場不可。

お問い合わせ：高知市文化振興事業団 088-883-5071

風 伯

テレビの無い生活

テレビを観る娯楽がなくなるし、テレビからの情報も一切入らなくなるが、いまの時代はどんな田舎にいても、処理しきれないほどの情報が入ってくるので困ることはない。が、まず気づかされたことは、テレビが映らなくなることで、こんなにも時間の余裕が出来るものかと驚かされ、同時にいつもの

引越しておよそ一カ月、私の不手際でテレビが映らない日が続いた。朝ドラの「あさが来た」や「夢の扉」「世界遺産」「百名山」など、いつものように観ていた番組を一切観ることができなくなった。家人にはたいへん不評であったが、不思議なもので観なければ観ないで済ませることができた。

生活と少し違うような気がした。二人で旅に出かけたり、テニスやゴルフなどをする。ことでの共通体験や、同じ人に会って話をしたりすること、共有できることはたくさんある。ネットでも再びテレビを観られるようになってから初めて気づかされたが、テレビを観ることで、そうした二人で旅をしているのと同じような共通する体験、とまではいえないかもしれないが、二人で共に体感することが出来る。これまであまり深く考えてはいなかったが、テレビは二人で旅行やスポーツをしているかのような、共有体感をさせてくれる、まことに簡便で便利な代物であった。ラジオと違って、受動的になつてしまつてしまつたが、誰かと共有化しそれを活用することで、能動的な素材になり得ることに、一カ月テレビの無い生活のおかげで気づかされた。

（霖）

竜馬四重奏



竜馬四重奏コンサート

邦楽打楽器のZIN、篠笛の翠、津軽三味線の雅勝、バイオリンの竜馬の4人からなる、古くて新しい和洋混合の新感覚ユニット「竜馬四重奏」のコンサート。

皆様に感動を届ける為、竜馬四重奏は挑戦を続けています。

和楽器とヴァイオリンが織りなす新しい音楽の世界をどうぞ堪能ください。

■日時

2016年6月25日（土）13:30 開場 14:00 開演

■会場

高知市文化プラザかるぽーと 小ホール

■料金

前売り 2,500円 当日 3,000円

■お問い合わせ

高知市文化振興事業団 088-883-5071

今号の表紙

「COFFEE BREAK」

佐藤 秋桜

5月は疲れやすい時期です。そんな時こそ、コーヒーを片手にゆっくり休んでほしいという思いからこのイラストを描きました。

（さとう こすも／

国際デザイン・ビューティカレッジ2年生）

はずむ、創造力。

SKIPPING IMAGINATION

第68回 アンデパンダンー

高知市展

絵画(洋画)・日本画・書道
先端美術(立体)・彫刻・陶芸
工芸・写真・ペン字・デザイン
～北見市美術交流作品～

2016.5.28^土 - 6.12^日 午前9時～午後6時(月曜休館)
初日:午前10時開場 / 最終日:午後5時終了

 高知市文化プラザ かるぽーと <7階市民ギャラリー>

かるぽーと

入場料 / 前売 300円 (当日400円)

療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・身体障害者手帳の各所持者と
その介護者1名及び長寿手帳所持者と高校生以下は無料

前売券販売所 / かるぽーとミュージアムショップ、高知プレイガイド ほか

出品料 / 一部門につき 一般 1,500円 学生 1,000円

搬入 / 2016年5月22日(日)、23日(月) 午前9時～午後5時
高知市文化プラザかるぽーと 7階市民ギャラリー

【お問い合わせ】

公益財団法人高知市文化振興事業団 電話:088-883-5071

主催:高知市農代表委員会、公益財団法人高知市文化振興事業団、高知市教育委員会
共催:高知新聞社、NHK高知放送局、RKC高知放送、KUTVテレビ高知、KSSさんさんテレビ

Kochi city (68th)
Art Exhibition
- INDEPENDANTS -

会期中・本チラシをご持参の方は
前売料金(300円)で
ご入場できます